

Sir William Temple の庭園論

——その批評史的意義——

高 山 修

この小論の意図は、18世紀英国の文学批評にみられる一つの比喩的表現をとりあげ、その比喩的表現を手がかりに、18世紀における文学観の変遷と庭園様式の変遷とが深いかわりをもっていることを指摘し、このかわりに Sir William Temple がどのように寄与したかを明らかにしようとするものである。

1

1780年、週刊誌 *The Mirror*, No. 100 に掲載された一文において、その筆者——筆者が誰であるかは不明であるが——は、当時上演された *Hamlet* が、いくつかの点で Shakespeare の原作と異なることをはげしく非難している。とくに、Aristotle の詩論からひきだされた古典劇の原則に反するという理由で墓掘りのシーンが省かれていることに抗議して、観客に大きな喜びをあたえるシーンを省くのはきわめて不当であると云って、つぎのようにのべている。

It seems therefore preposterous, to endeavour to *regularise* his plays, at the expense of depriving them of this peculiar excellence, especially as the alteration can only produce a very partial and limited improvement, and can never bring his pieces to the standard of criticism, or the form of the *Aristotelian* drama. Within the bounds of a pleasure-garden, we may be allowed to smooth our

terraces and trim our hedge-rows; but it were equally absurd as impracticable, to apply the minute labours of the *roller* and the *pruning-knife* to the nobler irregularity of trackless mountains and impenetrable forests.

ここで、この筆者は、Shakespeare の作品を整然とした庭園にはみられないけだかさをもった人跡未踏の山野にたとえ、この山野のなかに地ならしのためのローラーや刈込みナイフをもちこんで、けちな修正を加えようと試みることが、いかに愚劣なことであるかを説いている。

創作にあたって法則や形式にこだわりすぎる態度と、法則や形式にとらわれずに独創性を十分に発揮する態度とを、それぞれ、手入れのよくゆきとどいた整然とした庭園と草木が自由に繁茂する原野とにたとえるというレトリックは、1780年、*The Mirror*, No. 100 の筆者によってはじめて使われたのではない。

ほぼ70年前、すなわち1711年、*The Spectator*, No. 160 において、Addison は、天才について論じ、二種類の天才があることを指摘している。第一は、技巧の力をかりずに天賦の才のみで創作する天才であって、Homer や Shakespeare はこの種の天才であり、第二の天才は、法則にたよる天才で、この場合、作家の生れつきの才能は正確な技巧の支配下におかれる、と Addison はのべ、さらに、

In the first it is like a rich Soil in a happy Climate, that produces a whole Wilderness of noble Plants rising in a thousand beautiful Landskips without any certain Order or Regularity. In the other it is the same rich Soil under the same happy Climate, that has been laid out in Walks and Parterres, and cut into Shape and Beauty by the Skill of the Gardener.

と書いている。

また、Addison は、*The Spectator*, No. 417 (1712年) において、

Homer と Virgil の作品をくらべて、

Reading the *Iliad* is like travelling through a Country uninhabited, where the Fancy is entertained with a thousand Savage Prospects of vast Desarts, wide uncultivated Marshes, huge Forests, mis-shapen Rocks and Precipices. On the contrary, the *Aeneid* is like a well-ordered Garden, where it is impossible to find out any Part unadorned, or to cast our Eyes upon a single Spot, that does not produce some beautiful Plant or Flower.³⁾

とのべ、Homer の作品を、広漠とした荒野や沼地、こんもり茂った森、奇岩や断崖、そんなものが入りまじった自然の光景にたとえ、Virgil の作品を、あらゆる部分がよく手入れされ、美しい草木が整然と植えられている庭園にたとえている。

つぎに、Addison とほぼ同時代の Pope の場合をみてみよう。Pope は、*An Essay on Criticism* において、法則を重んじる古典主義的立場をあきらかにしたが、決して法則遵守のみが創作家のとりうる道であると考えたわけではなかった。⁴⁾ このことは、*An Essay on Criticism* の ll. 141-160 におけるかれの主張にあきらかである。この主張を要約すると、「いかなる法則によっても説きあかしえない美がある。それは巨匠のみが達しうる美である。法則というものは、目的達成のためにあるものだから、法則が目的に合わぬときは、法則を無視して自由な立場で創作することができる。このように法則をふみはずして、一挙に核心にふれ、目的を達成する天才的作家の作品には、法則を守る作家の作品にはみられない独特の美がある」ということになる。

さて、このような立場をふまえた Pope は、1715年、かれが英訳した *Iliad* の序文において、Homer の独創の才が比類ないものであることをのべた後で、“It is the invention that in different degrees distinguishes all great geniuses; the utmost stretch of human study, learning,

and industry, which masters everything besides, can never attain to this.”とのべて、invention の重要性を説いている。つづいて、

It [invention] furnishes Art with all her materials, and without it judgment itself can at best but *steal wisely*. For Art is only like a prudent steward that lives on managing the riches of Nature. Whatever praises may be given to works of judgment, there is not even a single beauty in them but is owing to the invention; as in the most regular gardens, however Art may carry the greatest appearance, there is not a plant or flower but is the gift of Nature.

とのべて、いかに高度な art や judgment があっても、“the riches of Nature,” “the gift of Nature” が根柢になれば、すぐれた作品が生まれないことを示唆している。さらに、art は nature の美を一般の人たちの目がとらえ易い姿に変える役割を果すだけのものであり、多くの批評家が、「偉大な、豊かな天才」(“great and fruitful genius”)よりも「規則正しい、分別ある天才」(“judicious and methodical genius”)を好む理由は、“they [critics] find it easier for them to pursue their observations through an uniform and bounded walk of Art than to comprehend that vast and various extent of Nature.”であるとのべている。そして、Pope は Homer の作品について、“Our author’s work is a wild paradise, where, if we cannot see all the beauties so distinctly as in an ordered garden, it is only because the number of them is infinitely greater.”と云っている。Homer の作品を、“an ordered garden”に対立させて、“a wild paradise”であるとする Pope の主張は、さきにもみた Addison の主張ときわめて似通っていることがわかる。

また、Oliver Goldsmith は、1765年出版のエッセイ集におさめられた“On a Taste for the Belles-lettres”と題する一文において、当時の文壇の支配的な趣向に不満をとなえて、技巧を重んじすぎると想像力は生氣

を失った花しか咲かせることができないと云って、つぎのようにのべている。

The imagination, sweated by artificial fire, produces nought but vapid bloom. The genius, instead of growing like a vigorous tree, extending its branches on every side, and bearing delicious fruit, resembles a stunted yew, tortured into some wretched form, projecting no shade, displaying no flower, diffusing no fragrance, yielding no fruit, and affording nothing but a barren conceit for the amusement of the idle spectator.⁹

また、Dr. Johnson が、法則にしばられなかった Shakespeare とフランス古典劇の巨匠 Corneille とをくらべて、「Corneille が刈込まれた生垣だとすれば、Shakespeare は森林のようなものだ」(“Corneille is to Shakespeare as a clipped hedge is to a forest.”)⁹と云ったことはよく知られているところである。

このように、1780年発行の *The Mirror*, No. 100 の *Hamlet* 論にみられた比喩的表現と非常に似通った表現が、すでに1710年代の Addison や Pope の著作にみられ、さらに Goldsmith や Johnson にもみられるわけである。もちろん、この比喩的表現が使われている context は、それぞれの場合に多少の違いがあることは云うまでもない。

上にあげたいいくつかの例から、作家の創作態度を論じる際に、整然とした人工的庭園と草木が繁茂する原野とをひきあいにだすという比喩は、18世紀英国の文学批評における一つの慣用的表現であったと考えられる。このことは、19世紀になって、Robert Southey が William Cowper の作品集を編纂したときに、Cowper の詩 *The Task* について、“The best didactic poems, when compared with the Task, are like formal gardens in comparison with woodland scenery.”¹⁰と云っていることから理解できるであろう。そして、この比喩的表現は、すでにみてきたことか

らも察知できるように、18世紀における文学観の変遷——コンヴェンショナルな云い方をすれば、規範を重んじる古典主義から個性のより自由な表現を重んじるロマン主義への推移——に、深いかわりをもっていると考えられるのである。

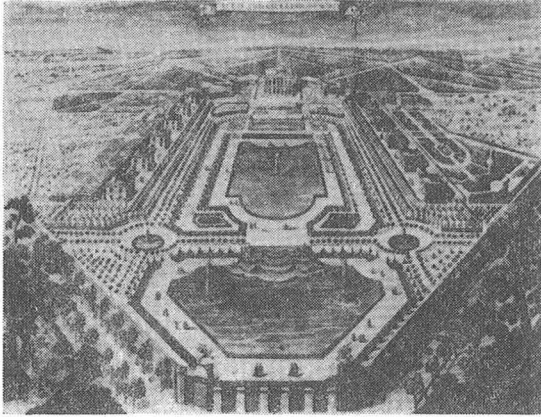
2

ここで問題となることは、この比喩的表現が、単なる思いつきから生まれた修辭的な比喩にすぎないのか、それとも、もっと深い意味をもつか否か、ということである。

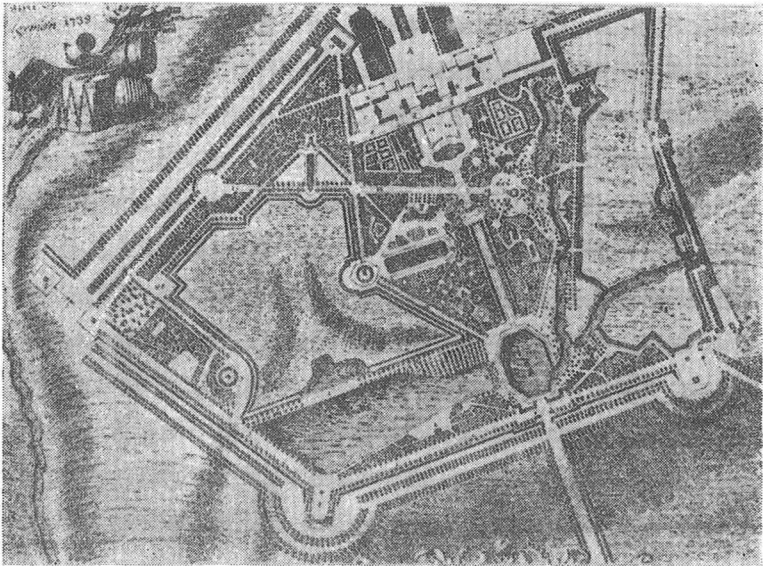
ヨーロッパの庭園様式の歴史を一見すると、この比喩は、決して単なる修辭的な比喩ではなく、実体をともなった比喩であることがわかる。「実体をともなった比喩」とは妙な云い方もわからないが、この点について少し説明を試みよう。

結論をさきに云えば、18世紀のヨーロッパ、とくに英国において、古典主義からロマン主義への文学観の変遷とほぼ平行して、同じような変化が庭園様式にもおこりつつあったと云うことである。

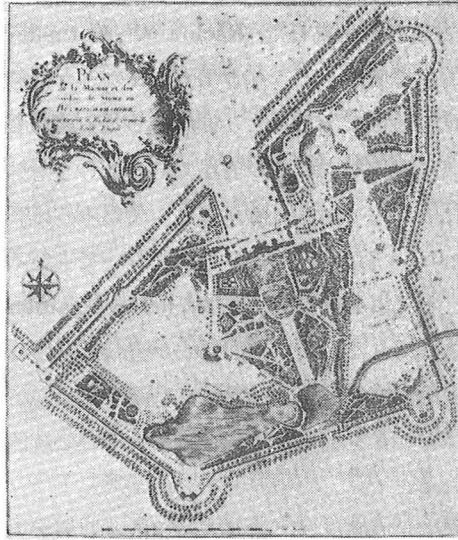
幾何学的な構成をもち、こじんまりと刈りこまれた木々が整然と植えられている庭園は、formal garden、あるいは regular garden とよばれる。¹⁰『日本の庭園』の著者森蘊氏は、この様式を「整型式庭園」とよんでいる。この整型式庭園はヨーロッパの代表的な庭園様式であって、*A History of Garden Design* の著者 Derek Clifford によれば、formal garden の起源は、古くギリシャ・ローマの時代までさかのぼりうるとのことであるが、この庭園様式が確立するのは、ルネサンスの時期においてであり、イタリアからヨーロッパ諸国にひろまったのである。とくに、17世紀後半に完成されたパリ郊外の Versailles 宮殿の庭園は、formal garden の一つの典型といわれている。図(1)に示したものは、Louis XIV 世の別荘として Versailles の近くの Marly につくられたもので、この庭園もまた当時の



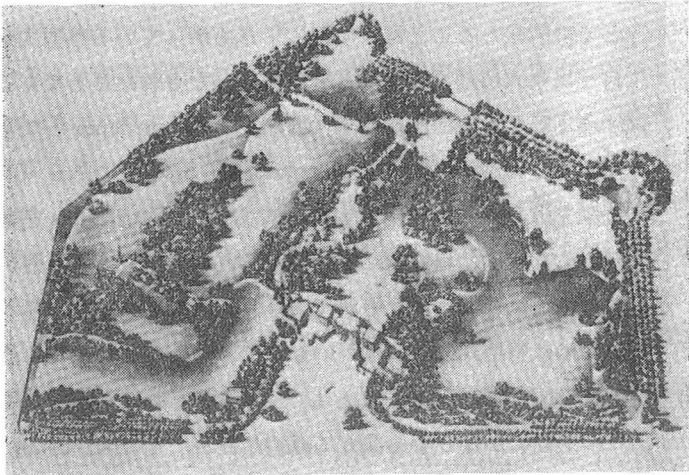
(1) Hardouin-Mansart の設計によって Marly につくられた Louis XIV の別荘



(2) Charles Bridgeman の設計による Stowe の庭園図



(3) William Kent の設計による Stowe の庭園図



(4) Lancelot Brown の設計による Stowe の庭園図

典型的な整形式庭園である。この庭園を完成させたのが Louis XIV 世であることと、古典劇を完成した Racine や Corneille、あるいは古典主義文学の理論的指導者とも云うべき Boileau などが活躍した時期が同じく Louis XIV 世の時代であることとは、決して無縁のことではなく、両者は、ともに古典主義的な taste の表現であるという意味において、その軌を一にする文化的現象であると考えてよいであろう。

この formal garden は、17世紀の英国においてもひろく流行したが、18世紀に入ると、とくに英国においては、natural garden あるいは landscape garden とよばれる新しい庭園様式が流行しはじめた。さきにあげた森蘊氏は、この庭園様式を「自然風景式庭園」とよんでいるが、これは、¹⁹自然の風景をうつすことを基本とする中国や日本の伝統的な庭園様式に近いものと考えられる。

さて、この庭園様式の発生は、Derek Clifford のことばを借りれば、ヨーロッパ庭園史における“great revolution”¹⁹であった。当時の英国では、幾人かのすぐれた庭園師があらわれて、この新しい自然風景式庭園を試みたが、とくに興味あることは、すでにできあがっている整形式庭園に手を加えて自然風景式に近づけようとする試みがなされたことである。たとえば、図(2)に示したものは、1730年代に、“royal gardener”であった Charles Bridgeman が英国南部 Buckingham 州 Stowe にある Buckingham 公の庭園を改造したときの“plan”であるが、Versailles 宮殿の庭園にみられるような極度に格式ばった趣向はそれほど目立っていない。しかし、かなり幾何学的な線が活かされており、木が等間隔に植えられているなど、基本的には整形式庭園にちかいものであることがわかる。そのうち、自然風景式庭園の創始者の一人としてよく知られている William Kent が、この庭園にかなり手を加えて改造したが、その図が図(3)に示されているものである。Bridgeman のデザインとくらべると、いくつかの直線が曲線にかわり、木の配列が変えられていることが目立っている。と

くに、図の下の部分にみられる池のまわりの線が直線から曲線にかわり、そのまわりの植込みがかなりかえられていることは注目し値する。そのうち、さらに、18世紀の中頃、名庭園師として有名な Lancelot Brown によって、この庭園がさらに改変された。図(4)が Brown によるデザインを示すものである。これは、はじめの Bridgeman のデザインとはかなり趣向がかわって、formal garden の色彩をほとんど失い、natural garden の性格がつよくでている。

もちろん、説明するまでもなく、この時代に、英国の庭園の多くが、このように整形式から自然風景式にかえられたわけではない。しかし、Derek Clifford¹⁹ や B. Sprague Allen がくわしく説明しているように、18世紀の英国において、庭園様式が大きな革命をとげたことは明白な事実である。私は、このような庭園様式の変化が、そのまま、文学の世界における反古典主義化の傾向とまったく軌を一にするものであるとは考えないが、他のいくつかの要因とともに、この庭園様式の変化が、文学におけるロマン主義への傾斜の姿勢に深いつながりがあることは否定できないと考える。

このような庭園様式の変革が、なぜ18世紀の英国に生じたのかということについては、種々の要因が考えられ、文学におけるロマン主義擡頭の要因とおなじく、簡単に説明することはできない。しかし、ここで、Sir William Temple の業績の一端をとりあげ、かれが、新しい庭園様式の発達を準備するのに注目すべき役割を果たしたこと、さらに、かれの文学観のなかに反古典主義的色彩がつよくみとめられることを指摘して、かれが18世紀文学にみられるロマン主義への傾斜の姿勢に興味あるかわりをもっていることを明らかにしたい。

3

Sir William Temple は、1628年に生まれ、Cambridge で学んだあと、

20歳のときにヨーロッパにわたり、数年間フランス、オランダ、イタリアなどで学んだ。帰国ののち数年間は、父親の家があったアイルランドで田園生活にしたしみながら読書の日々をすごしたが、1660年、王政復古を機に、政治家としての、また外交官としての活躍がはじまった。とくに、外交官としての働きはめざましく、Charles II 世の王女 Mary と、のちに英国王にむかえられた Orange 公 William との結婚をまとめたり、争いのたえなかった英国とオランダとの和平工作に活躍するなど、大いに外交的手腕をふるった。しかし、53歳の頃から1699年の死にいたる10数年間は、Surrey 州の美しい自然にかこまれた Moor Park の大邸宅——因に、Swift が Temple の秘書役をつとめたのはこの邸宅においてである——で、悠々自適の生活をおくり、エッセイの執筆や読書のかたわら、庭づくりに精を出したと伝えられている。Temple は、政治についてのいくつかの著作とともに、*Miscellanea* と題するエッセイ集3巻を公にしたが、第1巻は1680年に、第2巻は1690年に、第3巻は、かれの死後 Swift の編纂によって、1701年に、それぞれ出版された。

Miscellanea 第2巻に、“Upon the Gardens of Epicurus; or, Of Gardening, in the Year 1685” と題するエッセイがおさめられている。Epicurus は、云うまでもなく、精神的快楽を最高の善と考えたギリシヤの哲学者であるが、アテネに最初の庭園をつくったのは Epicurus であるといわれている。しかし、Temple のこのエッセイは、とくに Epicurus のことだけを論じたものではなく、庭園が人間の精神生活にいかにか大きな喜びをあたえるものであるかを説いて、庭園趣味の推移をギリシヤの時代からあとづけ、さらに、庭がいかにつくられ、世話されるべきかを論じたものである。

造園に際して留意すべきこととして、かれは、植木の種類や土や天候についてかなりくわしく論じているが、庭のかたちについては、

The best Figure of a Garden is either a Square or an Oblong,

and either upon a Flat or a Descent; they have all their Beauties, but the best I esteem an Oblong upon a Descent. The Beauty, the Air, the View makes Amends for the Expense, which is very great in finishing and supporting the Terras-Walks, in levelling the Parterres, and in the Stone-Stairs that are necessary from one to the other.¹⁶

とのべている。そして、かれがもっとも模範的と考える庭園として、かれ自身が晩年をすごした Moor Park の庭園をあげている。この庭園は、周辺部においてはやや自然風景式の趣向がうかがわれるが、中心部は整型式の色彩がつよくあらわれたものである。このことから、また上にあげた Temple のことばからも推察できるように、かれが実際の造園の手本として考えていた庭園様式は formal garden であったと考えられる。

しかし、このエッセイのおわり近くに、かれがのべているつぎのことばは、この小論の主題に関してきわめて注目に値する。

What I have said of the best Forms of Gardens, is meant only of such as are in some Sort regular; for there may be other Forms wholly irregular, that may, for aught I know, have more Beauty than any of the others; but they must owe it to some extraordinary Dispositions of Nature in the Seat, or some great Race of Fancy or Judgment in the Contrivance, which may reduce many disagreeing Parts into some Figure, which shall yet upon the whole be very agreeable. Something of this I have seen in some Places, but heard more of it from others, who have lived much among the *Chineses*; a People, whose Way of Thinking seems to lie as wide of ours in *Europe*, as their Country does. Among us, the Beauty of Building and Planting is placed chiefly in some certain Proportions, Symmetries, or Uniformities; our Walks and our Trees ranged

so as to answer one another, and at exact Distances. The *Chineses* scorn this Way of Planting, and say a Boy, that can tell an Hundred, may plant Walks of Trees in straight Lines, and over against one another, and to what Length and Extent he pleases. But their greatest Reach of Imagination is employed in contriving Figures, where the Beauty shall be great, and strike the Eye, but without any Order or Disposition of Parts, that shall be commonly or easily observ'd. And though we have hardly any Notion of this Sort of Beauty, yet they have a particular Word to express it; and, where they find it hit their Eye at first Sight, they say the *Sharawadgi* is fine or is admirable, or any such Expression of Esteem.... But I should hardly advise any of these Attempts in the Figure of Gardens among us; they are Adventures of too hard Achievement for any common Hands; and though there may be more Honour if they succeed well, yet there is more Dishonour if they fail, and 'tis Twenty to One they will; whereas, in regular Figures, 'tis hard to make any great and remarkable Faults.¹⁰

かなりながい引用であるが、その要点をまとめてみると、Temple は、「形式に拘束されない庭園の方が、形式にはまった庭よりも、いっそう美しい。しかし、形式にはまらぬ美しい庭をつくりあげるためには、その土地の自然条件もさることながら、つくる者に余程の才能がなくてはならない。とくに、並々ならぬ想像力 (fancy) と判断力 (judgment) とが具わっていなければならない。このような庭は中国に多いと聞くが、建築や造園にあたって、われわれが均斉や統一、あるいは幾何学的構成を重んじるのに反して、中国では、小さな部分のまとまりを無視して、想像力を大胆にはたかせ、全体の美が直接に訴えるような形をつくる。かれらは、このような美を *sharawadgi* ということばでよんでいる」と説き、さらに、

「しかし、この種の美をつくりだそうと試みることは易しいことではない。普通の才能の持主では成功率はきわめて少い。それに反して、規則正しい庭の場合は、失敗を犯す可能性はきわめて小さい」と主張しているのである。

ここで Temple が中国のことばとしてあげている “sharawadgi” という奇妙な語については、すでに幾人かの研究者がこの語にあてはまる中国のことばをみつけようと努力し、いくつかの仮説をたててきた。これらの仮説について、S. Lang と Nikolaus Pevsner (かれはロンドン大学の教授で美術史、建築史の権威者の一人である) とが、“Since none of these explanations wholly satisfies, can it be that Temple made up the word himself?”¹⁹ という疑問をなげかけているが、どの説にも明確な根拠はなさそうであり、私も、この語については、Temple の聞きあやまりか、Temple の造語ではないかと考えている。²⁰ しかし、いずれにせよ、この語の意味は、上に引用した Temple のことばから判断して、「一見して不統一と思われるものから直観的に感じとれる美」という意味に解してよいと考える。

そして、この “sharawadgi” という語が *O. E. D.* に収録されていることからわかるように、Temple がこの “Upon the Gardens of Epicurus” においてはじめてこの語を紹介して以来、この語は当時の知識人の間にかなりひろく普及したものと考えられる。そして、つぎにのべるごとく、この一文にみられる Temple の主張は、単に当時の庭園観に一つの大きな刺戟をあたえただけでなく、ひろく18世紀における感性の変化をうながす要因の一つになったと考えてよいのではないかと思う。

たとえば、*The Spectator*, No. 414 の Addison のエッセイをみてみよう。Addison は、No. 414 のエッセイを、“If we consider the Works of Nature and Art, as they are qualified to entertain the Imagination, we shall find the last very defective, in Comparison of the former ;

for though they may sometimes appear as Beautiful or Strange, they can have nothing in them of that Vastness and Immensity, which afford so great an Entertainment to the Mind of the Beholder.”²⁰⁾ といふことばではじめ、つづいて、

The Beauties of the most stately Garden or Palace lie in a narrow Compass, the Imagination immediately runs them over, and requires something else to gratifie her; but, in the wide Fields of Nature, the Sight wanders up and down without Confinement, and is fed with an infinite variety of Images, without any certain Stint or Number.²¹⁾

とのべて、“the most stately Garden”の美しさも“the wide Field of Nature”の美しさには及ばないことを指摘している。この Addison の主張が、はじめにとりあげた *The Spectator*, No. 160 と No. 417 における Addison の文学観ときわめて密接なつながりがあることは、直ちにわかるが、この No. 414 の最後において Addison がのべているつぎのことばは、さきにもみた Temple の主張をつよく反映している。²²⁾

Writers, who have given us an Account of *China*, tell us, the Inhabitants of that Country laugh at the Plantation of our *Europeans*, which are laid out by the Rule and Line; because, they say, any one may place Trees in equal Rows and uniform Figures. They chuse rather to shew a Genius in Works of this Nature, and therefore always conceal the Art by which they direct themselves. They have a Word, it seems, in their Language, by which they express the particular Beauty of a Plantation that thus strikes the Imagination at first Sight, without discovering what it is that has so agreeable an Effect. Our *British* Gardeners, on the contrary, instead of humouring Nature, love to deviate from it as much as possible.

Our Trees rise in Cones, Globes, and Pyramids. We see the Marks
of the Scissars upon every Plant and Bush.²⁰

この文にみられる “a Word... by which they express the particular Beauty of a Plantation that thus strikes the Imagination at first sight, without discovering what it is that has so agreeable an Effect” は、云うまでもなく Temple の “sharawadgi” を指していることは明らかである。

また、Pope は、*Guardian*, No. 173 (1713年) において、Sir William Temple の名をあげて、庭園についての Temple の見解を紹介し、かれの立場に賛意を示している。さらに、Pope は、“the modern practice of gardening” が植木を “the most regular and formal shapes” に刈りこむことによって “to recede from Nature” の傾向を示していることをなげき、

I believe it is no wrong observation, that persons of genius, and those who are most capable of Art, are always most fond of Nature : as such are chiefly sensible, that all art consists in the imitation and study of Nature. On the contrary, people of the common level of understanding are principally delighted with the little niceties and fantastical operations of Art, and constantly think that finest which is least natural.²¹

とのべている。

ここにみられる Pope の見解は、さきにみた *Essay on Criticism* や “Preface to the Translation of the *Iliad*” での Pope の主張と軌を一にするものであるが、このことから、Pope の文学観に対する Temple の impact の一端が理解できると考える。

また、1755年、*The World*, No. 118 に庭園論を書いた Richard Owen Cambridge は、Temple が “Upon the Gardens of Epicurus” で整型

式庭園の色彩がつよい Moor Park の庭を大へんほめたことを指摘したあとで、 “...yet after he [Temple] has extolled it [the Garden at Moor Park] as the pattern of a perfect garden for use, beauty, and magnificence, he rises to nobler images and in a kind of prophetic spirit points out a higher style, free and unconfined.”²⁹⁾ とのべて、 Temple が “prophetic spirit” でもって形式にとらわれぬ自由な庭園様式を説いたことの業績をたたえている。 Cambridge は、ヨーロッパにおいてこの新しい庭園様式をはじめて実際にとり入れたのは英国人であると、誇らしげに、つぎのごとくのべている。

Whatever may have been reported, whether truly or falsely, of the Chinese gardens, it is certain that we are the first of the Europeans who have founded this taste; and we have been so fortunate in the genius of those who have had the direction of some of our finest spots of ground, that we may now boast a success equal to that profusion of expence which has been destined to promote the rapid progress of this happy enthusiasm. Our gardens are already the astonishment of foreigners, and in proportion as they accustom themselves to consider and understand them, will become their admiration.²⁹⁾

そして、この Cambridge のことばが、かれの独りよがりのたわごとでなかったことは、 Samuel H. Monk が、 “It is true that another art — landscape gardening — took its rise in the eighteenth century, but in this instance the case is different. England led the way; France and Germany merely followed, and were happy to imitate the ‘English garden.’ Both in the theory and the practice of landscape gardening England asked advice of none, save of course, in the case of the pseudo-Chinese garden, popularized by Sir William Temple and

others.”²⁸⁾ とのべていることばからも明らかであろう。

このように、Temple の庭園論が、新しい庭園様式、さらには文学や美術における新しい感性の芽生えをうながす一つの要因になったことの証左は、Addison, Pope, Cambridge の著作のほかにも、William Mason による長詩 *The English Garden* (1772-81) や *The Castle of Otranto* の著者である Horace Walpole の書簡などにもみられる²⁹⁾。

もちろん、Temple の “Upon the Gardens of Epicurus”, とくにそのなかで “sharawadgi” に言及している一節が、18世紀英国における新しい庭園様式、ひいては新しい文学観の擡頭に果たした役割をあまりにも高く評価することは不当であろう。たしかに、Derek Clifford や Sprague Allen も指摘しているように、Temple 以前に、Milton, Andrew Marvell, Abraham Cowley などの文人たちも、新しい庭園様式の擡頭になんらかの寄与をしたことは事実であろう。しかし、以上みてきたことから、Samuel H. Monk が、“sharawadgi” に言及している “Upon the Gardens of Epicurus” の一節について、“This casual paragraph was to have unexpected effects on the theory and practice of landscape gardening throughout Europe during the following century. Both Addison and Pope, who, it is little exaggeration to say, were the originators of landscape gardening in England, were impressed by Temple’s account of *sharawadgi*.”³¹⁾ とのべていることばは、決して過言ではないと考える。

4

それでは、なぜこの “Upon the Gardens of Epicurus” の一節がかくも大きな影響をもちえたのであろうか。すぐれた外交官として Temple の名がひろく知れわたっていたために、当時の知識人たちが Temple の著作を深い関心をもって読んだということ、Temple の文体がすぐれたもので

あったために、かれの著作が文体をみがくための “exercises and models” として使われたということ、このようなこともその理由の一端を説明するのであろう。しかし、これだけでは、決して、この疑問を十分に説明することにはならない。

“Upon the Gardens of Epicurus” のこの一節が、当時の知識人たちにつよい impact をあたえた大きな理由の一つは、この一節が中国のことに言及しているからだと考える。

17世紀から18世紀にかけて、英国のみならず、ひろくヨーロッパ諸国において、東洋文化への関心が異様と思えるほど急速にたかまりつつあったことは、よく知られていることである。Sprague Allen は、その著 *Tides in English Taste, 1619-1800* において、とくにこの点を強調し、この時代に東洋の文化的所産がヨーロッパ文化、とくに英国の文化に大きな影響をあたえたことについて、

From 1600, when the British East India Company was organized, England had a direct contact with India, Siam, China, and Japan that, in the course of the century, disseminated greater knowledge of the East, and by importation made Englishmen increasingly familiar with the products of Oriental manufacture. As a result, at the very period when Inigo Jones, Webb, and Wren were doing all in their power to establish the supremacy of classic architecture and the ideals of symmetry and proportion which were its integrating principles, there was developing an interest in the art of the East which was destined to have its share in ultimately undermining the authority of ideas of design inherited from Western antiquity.³⁹

とのべている。

16世紀末から18世紀にかけて、英国では、東洋、とくに中国を紹介する書物がかなり多く出版されている。たとえば、1588年には、スペイン人

Gonzalez de Mendoza の著書の英訳 *The Historie of the great and mightie Kingdom of China* が出版され、有名な Richard Hakluyt の *The Second Volume of the Principal Navigations, Voyages, Traffiques and Discoveries of the English Nation* (1599) には、“Certain reports of the mighty Kingdom of China,” “A discourse of the Isle of Japan and other Isles in the East Ocean,” “An excellent description of the Kingdom of China and of the government thereof” の三篇がふくまれている。また、1669年には Jan Nieuhof のオランダ語の著書を John Ogilby が英訳した *An Embassy from the East-India Company of the United Provinces to the Grand Tartar Cham, Emperor of China* が、1697年には、フランスのジェスイット派の宣教師 Louis Lecomte の著書の英訳 *Memoirs and Observations, Topographical, Physical, Mathematical, Mechanical, Natural, Civil and Ecclesiastical, made in a late Journey through the Empire of China* が、それぞれ出版されている。そのほか当時出版された東洋に関する書物は数多くあるが、この点について、Sprague Allen は、“... in the late sixteenth century, and especially in the seventeenth and eighteenth centuries, following the organization of the British East India Company and more intimate commercial relations, there was at hand an increasing supply of English books spreading a knowledge of India, China, and Japan and exciting an interest in their alien civilization.”³⁴ とのべている。

こうした書物のなかで中国がどのようにあつかわれているかについて、ここでくわしく論じる紙面はないが、多くの場合、中国のすがたはかなり理想化されて描かれている。³⁵ たとえば、さきにあげた Lecomte の著書の英訳 *Memoirs and Observations* の序文には、“Of all the Kingdoms of the Earth *China* is the most celebrated for Politeness and Civility, for Grandeur and Magnificence, for Arts and Inventions.”³⁶ と記され

ている。

Temple 自身も中国についてはかなり深い関心をもっていたと考えられる。かれは、“Upon the Gardens of Epicurus”において中国の庭園にふれているだけではなく、“An Essay upon the Ancient and Modern Learning”や“Of Poetry”においても中国の政治や文化についてかなり多く言及しており、とくに“Of Heroic Virtue”と題するエッセイの第2章(Section II)においては中国の地理、政治、文化などについてくわしく説明している。たとえば、北京にある“The palace of the Emperor”がいかに壮大なものであるかを紹介して、その庭園のことにふれ、

Without these Courts are large and delicious Gardens, many artificial Rocks and Hills, Streams of Rivers drawn into several Canals faced with square Stone, and the whole achieved with such admirable Invention, Cost, and Workmanship, that nothing Ancient or Modern seems to come near it; and all served with such Magnificence, Order, and Splendor, that the Audience of a Foreign Ambassador, at *Peking*, seems a Sight as Great and Noble, as one of the Triumphs at *Rome*.³⁷

とのべて、中国の庭園のすばらしさをたたえている。また、孔子の思想がいかにすぐれたものであるかを説明し、孔子が“a very extraordinary Genius, of mighty Learning, admirable Virtue, excellent Nature, a true Patriot of his Country, and Lover of Mankind”³⁸とよぶに値する人物であるとのべている。さらに、中国の政治組織その他を論じたあとで、

Upon these Foundations and Institutions, by such Methods and Orders, the Kingdom of *China* seems to be framed and policed with the utmost Force and Reach of Human Wisdom, Reason, and Contrivance; and in Practice to excel the very Speculations of other Men, and all those imaginary Schemes of the *European* Wits, the

Institutions of *Xenophon*, the Republic of *Plato*, the *Utopia's* or *Oceana's* of our Modern Writers.

と結論して、ヨーロッパとくらべて、中国が各方面においていかに卓越しているかを説いている。

Arthur O. Lovejoy は Temple について “In England apparently the earliest, and certainly the most zealous, enthusiast for the Chinese was Sir William Temple.”³⁹ と云っており、また、Lee Andrew Elioseff は、*The Cultural Milieu of Addison's Literary Criticism* のなかで、18世紀批評における the sublime の概念について論じながら、Temple に言及し、“Temple's preference for Oriental designs and paintings comes closest to the real source of this aspect of English taste for the diffuseness and greatness which are found in the imitations of natural wildness.”⁴⁰ とのべている。

Temple の中国観については、稿をあらためて論じてみたいと考えているが、以上みてきたことから推察できるように、中国文化の英国文化に対する影響という点で、Temple が果たした役割はかなり大きなものであると考えられる。

とくに重要なことは、“Upon the Gardens of Epicurus”における中国の庭園についての言及からも察しられるように、東洋の文化的所産のなかにヨーロッパ人が見出した美の価値観は、法則を重視し、幾何学的秩序を重んじる古典主義的芸術観とは相容れないものであったということである。Sprague Allen は、この点について、

Asymmetry, neglect of meticulously scaled proportions, ignorance of perspective, and indifference to abstract design in favour of more naturalistic patterns were alien elements which Oriental art introduced into the classic environment of the English house of the late seventeenth and eighteenth centuries.... Oriental art served to

educate the eye and to accustom it to a freer play of line and a more irregular spacing of masses. It is reasonable to suppose that, as time went by, it encouraged at least a tolerance, if not an enjoyment, of asymmetry, and, rendering taste more eclectic and more catholic in its sympathies, enabled it to find satisfaction in artistic methods having little in common with classicism.⁴⁹

とのべている。また、Arthur O. Lovejoy は、“a turning-point in the history of taste”は、古典主義的規範ともいふべき“regularity, simplicity, uniformity, and easy logical intelligibility”が公然と非難的になり、真の美が“geometrical”なものであるとする“assumption”に疑いをもたれはじめた時点にあると指摘して、“And in England, at all events, the rejection of this assumption seems, throughout most of the eighteenth century, to have been commonly recognized as initially due to the influence and the example of Chinese art.”⁴⁹とのべて、中国の芸術的所産が古典主義的立場に与えた impact の大きさを指摘している。Allen や Lovejoy のこれらの指摘は、18世紀末から19世紀はじめにかけて頂点に達したと考えられるロマン主義が、その一つの側面として東洋趣味をもっていた事実を、その embryo の時点において説明することにならないだろうか。

このような背景を念頭において、Temple の時代における中国への深い関心、さらには Temple 自身の中国への関心を考えてみると、かれの“Upon the Gardens of Epicurus”における中国の庭園への言及は、単に庭園様式史上におけるエピソードであるのみならず、18世紀における文学観の変遷にもかなり重要な意味をもつものであることが理解できるであろう。

以上、Temple の庭園論が、18世紀の文学観にいかんにか反映しているか、さらに、古典主義的芸術観への一つの挑戦としていかなる意義をもっているかを考察したが、最後に、Temple の詩論をとりあげて、かれの反古典主義的立場をより明確に示してみたい。

Temple は、“Upon the Gardens of Epicurus”と同じく *Miscellanea* の第2巻(1692年)におさめられた“Of Poetry”において、かれの詩論を語っている。かれは、法則を学ぶだけでは手に入れることのできない独創の才を強調し、すぐれた詩を生みだす原動力は、“Elevation of Genius, which can never be produced by any Art or Study, by Pains or by Industry, which cannot be taught by Precepts or Examples; and therefore is agreed by all, to be the pure and free Gift of Heaven or of Nature, and to be a Fire kindled out of some hidden Spark of the very first Conception.”⁴⁰ であると説いている。

しかし、かれは、こうした天賦の才だけですぐれた詩が生みだせると考えたわけではなく、“But though Invention be the Mother of Poetry, yet this Child is, like all others, born naked, and must be Nourished with Care, Cloathed with Exactness and Elegance, Educated with Industry, Instructed with Art, Improved by Application, Corrected with Severity, and Accomplished with Labour and with Time, before it arrives at any great Perfection or Growth.”⁴⁰ とのべて、詩人は労力と時間をかけて天賦の才をみがきあげねばならないと主張している。さらに、詩人には“the Heat of Invention and Liveliness of Wit”とともに“the Coldness of good Sense and Soundness of Judgment”が必要であり、この両者がそなわってこそ“sublime and just, amazing and agreeable”な作品ができあがるのであると説いて、“There must be a great Agitation of Mind to invent, a great Calm to judge and correct.”⁴⁰ とのべている。このように、詩作の条件として、心のはげしいたかまりと、

判断し、正しいものをえらびだす静かな落着きとをあげる Temple のことばから、ただちに Wordsworth の有名な “emotion recollected in tranquillity” ということばを思いおこすことは、少々飛躍の度がすぎるとしても、かれらの考え方には基本的に一脈相通じるものがあると思う。

もちろん、Temple が独創の才と正確さを詩作の条件と考えたことは、はじめにみた Pope の立場に似通っていることは疑えない。しかし、Pope が法則の無視をあくまで例外的なものと考えたことを念頭におくと、私は、反古典主義的な態度という点においては、年代的な順序とは逆に、Pope よりも Temple の方により新しい姿勢——ロマン主義への傾斜の姿勢——がみとめられると考える。このことは、つぎにあげる Temple のことばに、より一層明瞭に示されていると思う。すなわち、かれは、“Of Poetry” において、フランスの古典主義者たちを非難して、

The Modern *French Wits* (or Pretenders) have been very severe in their Censures, and exact in their Rules, I think to very little Purpose; for I know not, why they might not have contented themselves with those given by *Aristotle* and *Horace*, and have Translated them rather than Commented upon them, for all they have done has been no more; so as they seem, by their Writings of this Kind, rather to have valued themselves, than improved any Body else.⁴⁷⁾

とのべ、つづいて、“The Truth is, there is something in the Genius of Poetry too Libertine to be confined to so many Rules: and whoever goes about to subject it to such Constraints loses both its Spirit and Grace, which are ever Native, and never learned, even of the best Masters.”⁴⁸⁾ と明言している。このような Temple の態度は、名匠が法則を無視してすぐれた詩を、つくりあげてを認めながらも、基本的には “Nature methodiz’d” であるところの法則を守ることを主張した Pope

の態度とは、軌を異にするものであると考えてよいであろう。

Literary Criticism in the Age of Johnson の著者 A. Bosker は、“In Temple’s *Essay* we find the first intimation of the danger that excessive attention to learning may involve.”⁴⁹ と云って、規則や学識に頼りすぎることの危険を最初に明示したという Temple の先駆者的な業績をみとめている。たしかに、古典主義的詩観に対する Temple の挑戦的態度の大胆さは、かれの時代の他の著作にはみられないものであろう。そして、Temple のこのような文学観は、Homer の作品や Aristotle の詩論からひきだされた法則を遵守するという古典主義的態度に疑いの目をむけていた人たちに大きな刺戟となったことであろう。

Temple の庭園論における “sharawadgi” への言及を、Temple 自身のこのような literary context のなかにおいて考えてみると、かれの庭園論がもつ批評史的意義がより明らかとなるであろう。

以上、私は、18世紀の文学論にみられる一つの比喩的表現に目をむけることからはじめ、Temple の庭園論をとりあげて、その批評史的意義を考察したが、私は Temple の〈新しさ〉を強調しすぎたかもわからない。しかし、私は、Pope や Addison を読み、そして Temple を読んだとき、Temple の〈新しさ〉を実感として感じとった。私は、この小論において、その実感をできるだけ客観的にうらづけてみようと思いたのである。

注

- 1) *The Mirror*, No. 100 (April 22, 1780) in *The British Essayists*, ed. by A. Chalmers (London, 1817), Vol. XXXV, pp. 269–270.
- 2) Donald F. Bond, ed., *The Spectator* (London: Oxford Univ. Press, 1964), Vol. II, p. 129.
- 3) *Ibid.*, Vol. III, p. 564.
- 4) この点については、『同志社女子大学学術研究年報』第13巻(1962)所載の拙論「Nameless Graces which no methods teach—An *Essay on Criticism*

についての一考察」を参照されたい。

- 5) Bertrand A. Goldgar, ed., *Literary Criticism of Alexander Pope* (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1965), p. 107.
- 6) *Ibid.*, p. 107.
- 7) *Ibid.*, p. 107.
- 8) James Prior, ed., *The Works of Oliver Goldsmith* (New York: John B. Alden, 1887), Vol. I, p. 264.
- 9) Cf. James Boswell, *Life of Johnson*, ed. G. B. Hill (London: Oxford Univ. Press, 1934), Vol. IV, p. 16.
- 10) Robert Southey, "Life of Cowper" in *The Works of William Cowper*, ed. Robert Southey (London: H. G. Bohn, 1853), Vol. I, p. 341.
- 11) 森蘊：『日本の庭園』（東京：創元社，1960），p.91.
- 12) Derek Clifford, *A History of Garden Design* (London: Faber and Faber, 1962), pp. 17-20.
- 13) 森蘊：『日本の庭園』，p.91.
- 14) Derek Clifford, *A History of Garden Design*, p. 123.
- 15) Cf. Derek Clifford, *A History of Garden Design*, pp. 123-160; B. Sprague Allen, *Tides in English Taste, 1619-1800; a Background for the Study of Literature* (New York: Pageant Books, 1958; first ed., 1937), Vol. II, pp. 115-143.
- 16) William Temple, *The Works of Sir William Temple, Bart.* (London, 1750), Vol. I, p. 185.
- 17) *Ibid.*, Vol. I, p. 186.
- 18) Cf. Y. Z. Chang, "A Note on Sharawadgi," *MLN*, XLV (1930), pp. 221-224; E. V. Gatenby, "The Influence of Japanese on English," *Studies in English Literature*, XI (Tokyo, 1931), p. 518; S. Lang and Nikolaus Pevsner, "Sir William Temple and Sharawadgi," *The Architectural Review*, CVI (1949), pp. 391-393.
- 19) S. Lang and Nikolaus Pevsner, "Sir William Temple and Sharawadgi," p. 391.
- 20) *OED* は、この語の語源について、"Of unknown origin; Chinese scholars agree that it cannot belong to that language." と記している。
- 21) *The Spectator*, Vol. III, pp. 548-549.
- 22) *Ibid.*, Vol. III, p. 549.
- 23) Cf. A. R. Humphreys, *William Shenston, an Eighteenth Century Portrait*

- (London: Cambridge University Press, 1937), p. 43: "Addison quotes Temple almost literally, though without acknowledgment, when he describes the Chinese who laugh at the plantations of Europe. . . ."
- 24) *The Spectator*, Vol. III, p. 552.
 - 25) *Guardian*, No. 173 (September 29, 1715) in *The British Essayists*, Vol. XVIII, p. 260.
 - 26) *The World*, No. 118 (April 3, 1755) in *The British Essayists*, Vol. XXVIII, p. 76.
 - 27) *Ibid.*, p. 78.
 - 28) Samuel H. Monk, *The Sublime, a Study of Critical Theories in XVIII-Century England* (Ann Arbor: The Univ. of Michigan Press, 1962; first ed., 1935), p. 164.
 - 29) Cf. Arthur O. Lovejoy, "The Chinese Origin of a Romanticism" in his *Essays in the History of Ideas* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1948), p. 112, p. 120.
 - 30) Cf. Clifford, *A History of Garden Design*, pp. 127-128; Allen, *Tides in English Taste*, Vol. I, pp. 115-122.
 - 31) Samuel H. Monk, "Introduction" in *Five Miscellaneous Essays by Sir William Temple*, ed. Samuel H. Monk (Ann Arbor: The Univ. of Michigan Press, 1963), p. XXV.
 - 32) *The Dictionary of National Biography* (London: Oxford Univ. Press, 1950), Vol. XIX, p. 531.
 - 33) Allen, *Tides in English Taste*, Vol. I, p. 180.
 - 34) *Ibid.*, Vol. I, p. 182.
 - 35) Cf. *Ibid.*, Vol. I, pp. 180-191.
 - 36) Cf. *Ibid.*, Vol. I, p. 183.
 - 37) Temple, *The Works*, Vol. I, p. 199.
 - 38) *Ibid.*, Vol. I, p. 200.
 - 39) *Ibid.*, Vol. I, p. 204.
 - 40) Lovejoy, *Essays in the History of Ideas*, p. 110.
 - 41) Lee Andrew Elioseff, *The Cultural Milieu of Addison's Literary Criticism* (Austin: Univ. of Texas Press, 1963), p. 118.
 - 42) Allen, *Tides in English Taste*, Vol. I, p. 234.
 - 43) Lovejoy, *Essays in the History of Ideas*, p. 135.
 - 44) Temple, *The Works*, Vol. I, p. 236.

- 45) *Ibid.*, Vol. I, p. 236.
- 46) *Ibid.*, Vol. I, p. 237.
- 47) *Ibid.*, Vol. I, p. 238.
- 48) *Ibid.*, Vol. I, p. 238.
- 49) A. Bosker, *Literary Criticism in the Age of Johnson* (New York: Hafner Pub. Co., 1953; first ed., 1930), p. 241.